

わが国におけるスクールソーシャルワーク研究の動向と課題 —論文タイトルを用いたテキストマイニング—

厨子 健一*

*福祉講座

Trends and Issues in the Study of School Social Work in Japan - Text Mining Using a Paper Title -

Ken-ichi ZUSHI*

**Department of Social Work, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

要 約

本研究はこれまでのわが国におけるSSW研究の動向を確認し、今後SSWが発展していくための課題を提示することを目的とする。論文タイトル284本を対象に、テキストマイニングの手法を用いて分析を行った。結果、頻出150語から、「スクールソーシャルワーク」「スクールソーシャルワーカー」「学校」「教育」「支援」「実践」が上位に挙げられた。共起ネットワークにおいては、主に【他専門職との関係】【SSWerが必要とされる領域】【SSW実践】にまつわるカテゴリーが抽出された。対応分析から、現在は、SSWの現状、効果、全国実態に目が向けられていることが明確となった。以上より、①SSWerの専門性をより焦点化した研究の必要性、②SSWerが必要とされるさまざまな領域におけるアプローチ法の提示、③教育委員会担当者による事業設計・運営の可視化、④実践する上での困難要因およびその対処方法の明確化、4点の課題を指摘した。

Keywords : スクールソーシャルワーク 研究の動向と課題 テキストマイニング

I はじめに

長女は昨年からようやく、フリースクールに通えるようになった。給食は出ないので、昼ご飯を食わずに過ごすことが多い。・・・(中略)・・・夕食は、午後7時すぎに帰宅する母親と食べる。モヤシだけの焼きそば、肉のかわりに12個で87円のウズラの卵が入ったカレー。(朝日新聞、2014. 12. 9 朝刊)

子どもの貧困が社会問題としてクローズアップされている。平均的な所得の半分を下回る世帯で暮らす18歳未満の子どもの割合を示す子どもの貧困率が、2016年に13.9%となった(厚生労働省2017)。子どもの貧困は、生活経験・教育機会の不平等さ(大澤2008)、学力格差の拡大(小西2006)、問題行動のエスカレート(峯本2010)を招くリスクを高める。

複合的な課題をもたらす子どもの貧困への早急な対応策が求められるなか、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が国会において成立した(内閣府2013)。子どもの貧困対策の柱のひとつとして、スクールソーシャルワーカー(以下、「SSWer」とする)の活用を掲げている(内閣府2014)。今後、SSWerの数を1万人に増やす目標が打ち出された。SSWerは、学校現場に配置される福祉専門職である。文部科学省によってSSWer活用事業が2008年度に開始され、全国的な配置が進められている(文部科学省2008)。SSWerは、貧困(岩田2009)、児童虐待(野田2006)、非行(入海2012)、いじめ(郭2012)、不登校(門田2002)などの課題に対して、子どもを取り巻く環境に焦点をあてた実践を展開する(山下

2011)。具体的には、子どもの家族支援（門田 2007）、子どもが通う学校の支援体制の構築（山野 2006）、学校と関係機関との連携促進（大塚 2011）が期待される。さまざまな領域への多くのアプローチが求められているといえよう。

スクールソーシャルワーク（以下、「SSW」とする）にまつわる議論が高まっている一方で、エビデンスに基づく実践の必要性（山野編 2015）、エビデンスの蓄積の重要性（Kelly et al. 2010）が指摘されている。有効性の可視化は長年の課題として位置づけられている（Kurtz 1987；Franklin 1999；山野 2010）。実践の歴史が浅く、学校関係者に他職種の役割との混乱を招く（比嘉 2000）ことが多いわが国では、そもそもどのような実践をしているのかについての実証的研究も必要と考えられる。加えて、福祉とは異なる教育現場に配置されるため、実践を行うにあたっての障害がいられている（山下 1998）。SSW 実践に影響を与える要因、実践をバックアップする仕組みに関する研究も重要ではないだろうか。

あらゆる論点が主張されるなか、過去の研究蓄積の整理を行った研究は数少ない。つまり、研究の動向を確認し、今後、SSW へアプローチする際の課題を述べた論文は限られている。SSW にかかわる実証的研究を進めていくのに先立ち、既存研究の整理によってこれからの研究の方向性を明らかにすることは肝要と考えられる。

II 研究目的

本研究はこれまでのわが国における SSW 研究の動向を確認し、今後 SSW が発展していくための課題を提示することを目的とする。

動向を明確にするため、論文タイトルを拠り所とする。論文タイトルは、その論文の内容を的確に、また具体的に示すものであるといわれている（秋元 2013）。実際、それを用いて、スクールカウンセリング（加藤 2007）、医療薬学（後藤ら 2011）、介護福祉教育（趙・谷口・原野・松田 2013）、介護福祉学（趙・谷口・原野・松田・谷川 2013）、介護（安・中嶋 2014）、公共政策（小田切 2014）の研究動向が探られている。これらの論文の共通点は、研究の到達点を踏まえ、ある一定の研究の方向性を見出していることである。ゆえに、SSW 研究において、本文内容の分析も重要であるが、論文タイトルから研究の動向と課題を読み取ることができると考えた。

III 研究方法

1 分析対象

分析対象となる論文タイトルの選定方法は、つぎのとおりである。

まず、文献検索に、CiNii Articles（国立情報学研究

所）¹⁾を用いた。「学校ソーシャルワーカー」「学校ソーシャルワーク」「スクールソーシャルワーカー」「スクールソーシャルワーク」をキーワードに検索した。結果、学校ソーシャルワーカー13本、学校ソーシャルワーク118本、スクールソーシャルワーカー230本、スクールソーシャルワーク222本、計583本の文献タイトルが抽出された²⁾。複数のキーワードにおいて、同一文献が存在したため、それらを考慮し、最終的に463本となった。

つぎに、463本の文献タイトルにおける原稿の種類を調べた。本研究では、SSW 研究の動向と課題を明確にすることを目的としていることから、分析対象を論文229本、研究ノート29本、調査報告12本、研究報告4本、自由研究2本、研究資料2本、総説2本、調査・研究1本、事例研究1本、研究動向1本、投稿論文・研究ノート1本、計284本とした^{3) 4)}。論文には、論文と記載されたもの以外に、特集論文、報告論文、論説、原著、原著論文、研究論文、学術論文、自由論文、公募論文、自由研究論文と表記されていたものを含めている。また、大学紀要などで原稿の種類が書かれていないものも論文に分類した。

以上から、284本の論文タイトルを分析に用いる。なお、本研究では、分析対象とする文献を論文と定義し、そのタイトルを分析する。

2 分析方法

本研究は、テキストマイニングに基づいて分析を行う。テキストマイニングは、文章という定性的なテキスト情報を系統的に、分析手続きのエビデンスを残しながら処理し（服部・鷺田 2008）、「数量化」と「視覚化」を質的研究に取り込んだもの（藤井 2005）である。テキストマイニングを選択した理由は、できるだけ分析者の影響を減らし SSW 研究の動向を示すことが、本研究を出発点とした研究テーマの設定や研究の応用を可能にすると考えたからである。分析には、KH Coder Ver2.00⁵⁾を活用した。

3 分析手順

分析対象となる論文タイトルから、つぎの手順によって分析する語の抽出を行った。

まず、品詞の整理、強制抽出する語の設定である。KH Coder では、分析対象となる論文タイトルが、名詞、サ変名詞、形容動詞、固有名詞、組織名、人名、地名、ナイ形容、副詞可能、未知語、感動詞、動詞、形容詞、副詞、名詞 B、動詞 B、形容詞 B、副詞 B、名詞 C、否定助動詞、形容詞（非自立）、その他、以上22品詞の形態素⁶⁾に分けられる⁷⁾。KH Coder は、活用のある語が基本形で抽出される。ここで、①未知語を確認し、強制抽出する必要のある語を選択する、②研究内容と関係性が薄い品詞を除外⁸⁾し、扱う品

詞を選択する、以上2点を行った。結果、①強制抽出する語は、「学校ソーシャルワーカー」「学校ソーシャルワーク」「スクールソーシャルワーカー」「スクールソーシャルワーク」「ソーシャルワーカー」「ソーシャルワーク」「協働」であり、②扱う品詞は、名詞、サ変名詞、形容動詞、人名、地名、ナイ形容、副詞可能、未知語、タグ⁹⁾、動詞、副詞、名詞 B となった。

続いて、類似語の置き換えについて検討した。学校ソーシャルワーカーとスクールソーシャルワーカー、子ども、生徒、児童など類似語があるが、本研究ではあえて置き換えを行わなかった。理由は、2つである。1つ目は、スクールソーシャルワークや学校ソーシャルワークを、単に英語表記かそうでないかという議論ではなく、学会あるいは論者の思いが込められたものである（日本学校ソーシャルワーク学会編 2008；門田 2015）という理由である。2つ目は、生徒、児童が「生徒指導」「児童生徒」といった熟語として用いられているケースが多く、置き換えることで解釈の妨げになると考えられたからである。

以上の語の抽出を経て、出現回数上位 150 語、出現パターンが互いに似通った語を線で結んだ共起ネットワーク、年代別の特徴的な語をプロットした対応分析を行った。

4 倫理的配慮

本研究は、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針、とくに「第2 指針内容 A 引用」「第2 指針内容 C 調査」を遵守し、実施した。

IV 結果

1 論文数の推移

年別の論文数を図1に示す。論文本数の平均は、8.11本であった。SSWer活用事業が開始された2008年前後で論文本数を比較すると、2007年以前で平均2.89本、2008年以後で平均29.00本である。

2 頻出 150 語

論文タイトルを形態素に分解した結果、総抽出語 2,338 語、異なり語 549 語であった。論文タイトル中の出現回数上位 150 語は、表1のとおりである。出現した語の上位には、「スクールソーシャルワーク」(120回)、「スクールソーシャルワーカー」(95回)、「学校」(74回)、「教育」(71回)、「支援」(69回)、「実践」(56回)、「課題」(47回)、「考察」(43回)、「子ども」(40回)、「学校ソーシャルワーク」(37回)が挙げられる。

3 共起ネットワーク

語と語の関連を探索するために、出現回数5回以上の語¹⁰⁾を活用して共起ネットワークを作成した。結果、15のカテゴリーからなるサブグラフ(random walks)が検出された(図2)。サブグラフ検出は、

比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出しグループ分けを行うもので、同じサブグラフに含まれる語は実線で結ばれる(樋口 2014)。つまり、実線でつながっている語同士は、関連性があるといえる。

結果、11のカテゴリーについて解釈ができ¹¹⁾、それらのカテゴリーを4つの大カテゴリーに分類した。4つの大カテゴリーは、【他専門職との関係】【SSWerが必要とされる領域】【SSW実践】【その他】¹²⁾と命名した。ここでは、カテゴリーを〔 〕、カテゴリーをさらにまとめた大カテゴリーを【 〕で表す。さらに、具体例として挙げる語を「 」、論文タイトルを、『 』で示す。

【他専門職との関係】は、SSWerと教育現場に配置されているその他の専門職との関係を扱ったものといえる。「スクール」「カウンセリング」¹³⁾などの〔スクールカウンセリング〕、「特別」「支援」「教育」「コーディネーター」などで構成される〔特別支援教育コーディネーター〕である。論文タイトル例として、『山下のスクールソーシャルワークの独自の機能—鵜養のスクールカウンセリングとの比較を通して』(比嘉 2000)が挙げられる。

【SSWerが必要とされる領域】は、SSWerによるアプローチが求められる領域を表したものである。「子ども」「虐待」などの〔子ども虐待〕、「児童」「生徒」「登校」で構成される〔児童生徒の登校〕、「障害」「報告」の〔障害〕である。論文タイトル例として、『虐待的養育環境にある子どもに対するスクールソーシャルワーク実践モデルの開発的研究—M-GTAの分析によるコーディネーターの援助プロセス』(西野 2009)がある。

【SSW実践】は、SSWerの教育現場における実践に焦点をあてたものである。「連携」「協働」などの〔連携・協働〕、「スクールソーシャルワーク」「実践」「事例」などで構成される〔SSWの実践事例〕である。論文タイトル例として、『スクールソーシャルワーカーの不登校支援における連携構造の検討』(大西ら 2012)が挙げられる。

【その他】は、「日本」「今後」の〔日本におけるSSWの今後〕、「アメリカ」「動向」「探る」などで構成される〔アメリカにおけるSSWの動向〕、「全国」「実態」「調査」といった〔SSWに関する全国実態調査〕、「養成」「プログラム」などの〔SSW養成プログラム〕である。論文タイトル例として、『横浜型スクールソーシャルワークシステムの構造と発展に向けた課題—日本における今後のスクールソーシャルワークへの提言』(小林ら 2014)が挙げられる。

4 対応分析

年代別の特徴的な語を探るために対応分析を行った。分析において、共起ネットワーク同様、出現回数5回

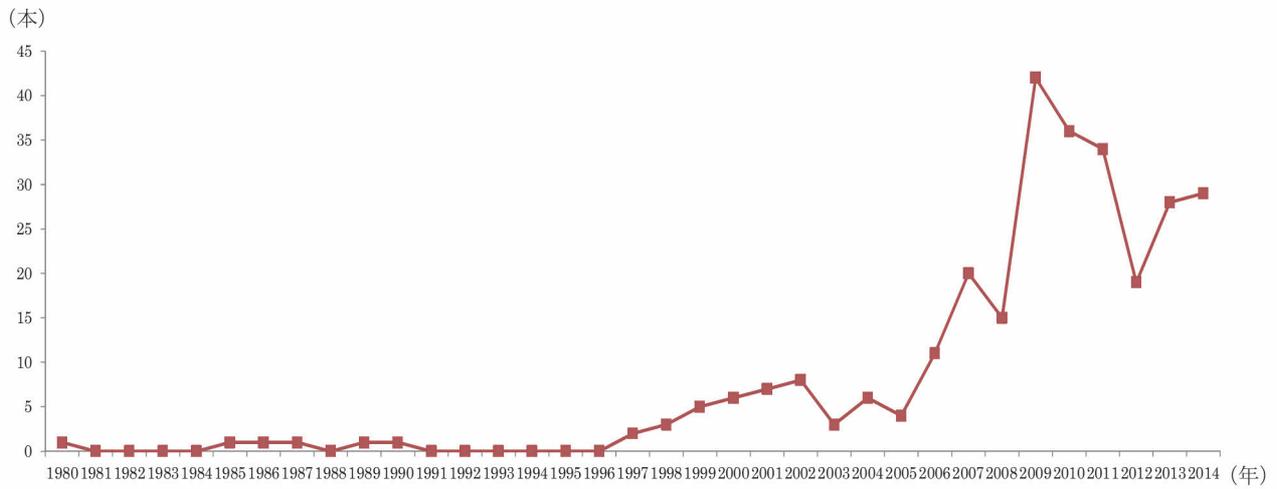


図1 論文数の推移

表1 頻出150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
スクールソーシャルワーク	120	虐待	9	カウンセラー	4
スクールソーシャルワーカー	95	指導	9	サポート	4
学校	74	制度	9	ヘルス	4
教育	71	相談	9	メンタル	4
支援	69	展開	9	ワーク	4
実践	56	求める	8	委員	4
課題	47	協働	8	意識	4
考察	43	現場	8	家族	4
子ども	40	社会	8	過程	4
学校ソーシャルワーク	37	障害	8	介入	4
研究	33	全国	8	学習	4
福祉	32	わが国	7	環境	4
役割	29	カウンセリング	7	基礎	4
調査	25	ソーシャルワーカー	7	基盤	4
ソーシャルワーク	22	プロセス	7	期待	4
特別	22	業務	7	経験	4
活動	21	構築	7	権利	4
専門	21	状況	7	考える	4
生徒	20	生活	7	高等	4
登校	20	対応	7	視座	4
児童	19	動向	7	実施	4
機能	18	養成	7	大阪	4
スクール	17	理論	7	仲介	4
視点	17	開発	6	適応	4
効果	16	学校ソーシャルワーカー	6	展望	4
活用	15	向ける	6	発達	4
現状	15	行政	6	貧困	4
事業	15	行動	6	保障	4
家庭	14	取り組み	6	崩壊	4
中心	14	焦点	6	有効	4
アメリカ	13	精神	6	要因	4
可能	13	体制	6	要素	4
導入	13	年代	6	臨床	4
分析	13	発展	6	アセスメント	3
事例	12	あり方	5	エコ	3
日本	12	ケース	5	チーム	3
配置	12	コーディネーター	5	トロント	3
連携	12	意義	5	パワー	3
モデル	11	学級	5	育成	3
教員	11	関係	5	演習	3
検討	11	関連	5	岡山	3
今後	11	結果	5	関わり	3
必要	11	健康	5	関わる	3
問題	11	探る	5	形成	3
援助	10	注目	5	経緯	3
教師	10	比較	5	検証	3
実態	10	保護	5	見える	3
アプローチ	9	報告	5	現代	3
システム	9	擁護	5	交互	3
プログラム	9	アンケート	4	校内	3

以上の語を活用した。年代については、1999年以前、2000年-2004年、2005年-2009年、2010年-2014年の4つに分けた。結果を図3に示す。2次元までの解の累積寄与率は、85.21%であった¹⁴⁾。対応分析では、対象間の相対的な関係(近い、遠い)だけに注目して解釈を進め(小杉 2005)、相関関係が高いものは近くにプロットされる(趙・谷口・原野・松田・谷川 2013)。

1999年以前は、「アメリカ」「動向」「ケース」「年代」、2000年-2004年では、「学校ソーシャルワーク」「カウンセリング」「指導」「機能」、2005年-2009年は、「養成」「教育」「福祉」「視点」、2010年-2014年は、「現状」「効果」「全国」「実態」などの特徴的な語が布置されている。

V 考察

本研究は、SSWの研究動向と課題を探ることが目的であった。頻出150語から1点、共起ネットワークについて2点、対応分析から1点、全体の結果を踏まえて2点を考察する。

1 頻出150語

頻出150語から、SSWerの介入対象とする「子ども」「家庭」「教員」、実践を示す「支援」「実践」「役割」「機能」といった語が上位に挙げられた。ここでは、役割・機能を具体的に表す語の少なさに注目する。

出現回数5回以上で役割・機能を示す語は、「連携」(12回)、「協働」(8回)、「擁護」¹⁵⁾(5回)のみであった。福祉ニーズに対してSSWの機能の明確化(山野 2007)、SSWの専門性の打ち出し(鵜飼 2008)、教育現場での認知の拡大(山下 2011)がいわれるなかで、特定の役割・機能を正面から扱う研究も必要ではないだろうか。たとえば、連携、協働、擁護以外に、アウトリーチ(山野 2010; 門田 2015)、仲介(大塚 2008; 山下 2011)、調整(農野 2009; 山下 2011)、社会資源の開発(山野 2006; 門田 2015)が挙げられる。個々の役割・機能をみていくことで、教育現場に配置される他専門職との違いも見出され、SSWの専門性がより明確になるといえる。

2 共起ネットワーク

共起ネットワークから、主に【他専門職との関係】【SSWerが必要とされる領域】【SSW実践】にまつわるカテゴリーが抽出された。【SSW実践】は、頻出150語同様、実践内容を示す語が少なく、実践全体に関心が向けられていると考えられる。つまり、特定の役割・機能、アプローチに着目した研究が少ないといえよう。ここでは、①【他専門職との関係】、②【SSWerが必要とされる領域】に注目する。

①では、スクールカウンセラー、特別支援教育コー

ディネーターとの関連性が注目されていた。これらの専門職との関係が取り上げられる背景として、似た動き方をする(野田 2008)、職務が重なる(大崎 2014)ことが考えられる。そのため、各専門職の専門性の違い(比嘉 2000; 大橋・今野 2011)や役割分担のあり方(和田 2010; 大崎 2014)などが議論されている。他専門職が導入され、混乱が生じている教育現場では(大橋・今野 2011)、SSWerを含む各専門職が、専門性をより明確にすることが重要と思われる。SSWerが専門性を提示する際、固有領域¹⁶⁾に目を向けることが必要ではないだろうか。たとえば、校内システム構築といったメゾレベル、市町村の教育・福祉協働システム作りへの関与などのマクロレベルの実践(比嘉 2000; 山野 2006; 大崎; 2014)が考えられる。

②において、SSWerは、本研究で明らかになった子ども虐待、不登校、障害以外にも、貧困(岩田 2009)、非行(入海 2012)、いじめ(郭 2012)といった領域への介入が必要とされている。とりわけ、子どもの貧困は社会問題となっており、児童虐待(金澤 2013)、不登校(新藤 2013)、非行(岩田 2009)との関連性が指摘される。SSWerは、子どもの課題は生活環境上のさまざまな要因が複雑に絡み合っているという視点に立ち(金澤 2014)、子どもと家族が置かれている社会構造にも目配せをした援助すること(岩田 2009)が特徴とされる。SSWerが介入する領域を広く設定し、領域間の関連性も意識したアプローチ法を提示することが、より必要ではないだろうか。

3 対応分析

対応分析から、4つの年代における研究動向を読み取ることができる。1999年以前、すなわちSSWに関する事業が複数自治体で開始される以前(山下 2011)は、アメリカの研究に着目していたとみられる。2000年-2004年では、教育現場に導入が進むにつれて、先行して配置されているスクールカウンセラーとの違いや養成のあり方が検討されたことが読み取れる。特に、2005年-2009年に「養成」「教育」という語が出現している背景には、2008年度より国事業となり、養成が喫緊の課題(鵜飼 2008)となったことが影響したといえよう。2010年-2014年は、「現状」「効果」「全国」「実態」などの語がみられる。ここでは、2010年-2014年に注目する。

2008年度から国事業となり、多くのSSWerが活動を始めているものの、全体像がみえない(大河内 2011)、実践現場における活用方法や効果が分からない(山野ら 2014)といわれている。そこで、現状、効果、全国実態を探る研究が増加したと思われる。とりわけ、有効性の可視化は長年の課題(Kurtz 1987;

Franklin 1999 ; 山野 2010) である。今後、SSWer の大幅な増員が見込まれるなか、教育現場からの承認および評価が必要とされる (山野 2015) 。したがって、効果を踏まえた実践の可視化が今後より一層重要といえよう。

4 全体の結果を踏まえて

ここでは、頻出 150 語、共起ネットワーク、対応分析の結果を通じて、注目されていないと思われる観点を記す。それは、①教育委員会担当者による事業設計・運営の可視化、②実践する上での困難要因およびその対処方法の明確化である。

①では、SSWer に研究の関心が向けられていたため、SSW 事業を動かす教育委員会担当者の事業設計・運営へ注目した文献が少ないことが示唆される。教育委員会担当者の事業設計・運営に求められる要素が、SSW 実践に影響を及ぼすことが明らかにされている (山野編 2015) 。しかし、SSW の人材マネジメント研究は少ない (厨子・山野 2013) 。福祉とは異なる教育現場に入ることの難しさが語られている (山下 1998 ; 岩崎 2007 ; 黒田 2013) なか、SSWer をバックアップする仕組みが重要と思われる。それは、SSWer の専門性発揮、1 人のワーカーの取り組みで終わらない SSW のシステム構築につながるものといえよう。

②において、SSWer は、教師からの抵抗感 (厨子・山野 2011 ; 比嘉 2013) 、SSWer に対する認知度の低さ (佐藤・金子 2010 ; 白旗・丸山 2015) 、他専門職との役割の混乱 (小柴住 2011 ; 厨子・山野 2011) 、活用形態における課題 (岩永・茶屋道 2011 ; 名城 2012) など、実践を行う上で障壁となりうる要素を抱えている。にもかかわらず、本研究では、影響要因や困難などを表す語が抽出されなかった。2019 年度までに SSWer の数を 1 万人にするという方向性が打ち出されている。今後、新たに教育現場に入っていく SSWer も多いと考えられる。実践の可視化に加えて、ワーカーが現場で遭遇する困難およびその対処方法を明確にすることも必要ではないだろうか。

VI おわりに

これまでの SSW 研究は、【他専門職との関係】【SSWer が必要とされる領域】【SSW 実践】を中心に扱い、実践では全容を明確にする研究が多いことが示唆された。このことは、役割・機能を具体的に表す語の少なさ、現在の研究の流れが、現状や全国実態の把握であることから裏づけられる。今後、SSWer の専門性をより焦点化した研究が必要と思われる。また、教育現場での課題が複雑多様化している今、SSWer のさまざまな領域におけるアプローチ法にかかわる研究が求められるといえよう。つまり、特定の

役割・機能に限定した研究、および児童虐待、貧困、非行といったあらゆる領域での実践にまつわる研究の重要性である。その際、常に効果との関連性が肝要と推察された。さらに、ほとんど着目されてこなかった観点では、教育委員会担当者の事業設計・運営、SSWer の実践における困難要因およびその対処方法を明らかにする重要性を考察した。

本研究は、論文タイトルに限定したことが限界である。今後、要旨、キーワード、本文内容の分析をとおして、より深く研究動向を探ることが課題である。課題はあるものの、できる限り客観的に、研究を進展させる動向を提示できたところに意義があると考えられる。

注

- 1) CiNii は、日本において、分野を特化せず最も網羅的な学術情報を提供しているデータベースであるといわれている (日誌・逸村 2010) 。
- 2) 2015 年 8 月 7 日現在の検索結果による。
- 3) 除外された文献は、学術誌以外の雑誌、学会発表要旨、翻訳、実践報告、海外動向、国際会議報告、視察報告、書評、短報、読みものなどである。
- 4) 論文以外、文献において示されていた原稿の種類をそのまま記している。なかには、投稿論文・研究ノートが区別なくセットになっている論文が存在した (岡安 2007) 。
- 5) KH Coder は、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析するために開発されたものである (樋口 2014) 。
- 6) 広辞苑第六版によれば、形態素を「意味を持つ最小の言語単位」と定義している。
- 7) 品詞の後ろに B が付いているものは、ひらがなのみの語、C が付いているものが、漢字一文字の語を表している。
- 8) たとえば、動詞 B では「する」「みる」「ある」、名詞 C においては「市」「手」「都」などが含まれている。
- 9) 強制抽出された語が分類されている。
- 10) 分析で使用した異なり語 (549 語) のうち上位 99 語 (18.03%) を用いている。
- 11) 全 15 カテゴリーであったため、4 カテゴリーは解釈が行われなかった。樋口 (2004) は、特定の主題と結びつかない一般的な語も完全に排除できず、解釈困難なクラスターも作成されてしまうことを指摘している。したがって、解釈できないカテゴリーが見出されたことは、やむを得ないと判断した。
- 12) カテゴリー同士をまとめることができなかったものを、【その他】に分類した。
- 13) カテゴリーの個々の語についても、上記 11) で

述べたような解釈困難な語が含まれる。よって、本研究では、研究動向を探索するという目的に合わせ、研究内容を的確に表す語の組み合わせに着目し、カテゴリーを解釈した。これは共起ネットワークを用いた多くの研究でなされている（後藤ら 2011；沢田 2013；岩渕・金子 2014；中嶋 2014）。

- 14) 累積寄与率に明確な基準があるわけではないが、70～80%あれば十分であるといわれている（小杉・清水 2005）。
- 15) 「擁護」を確認すると、5回中4回は権利擁護、1回は人権救済・擁護活動という用いられ方であった。よって、「擁護」は、アドボカシーの役割・機能であると判断した。
- 16) 大崎（2014）は、スクールカウンセリングとSSWのミクロレベルでの実践領域の重なりを「共通領域」、独立した実践領域（専門領域）の互いに影響を及ぼし合う領域を「協働領域」、SSWの固有領域であるメゾ・マクロ領域を「固有領域」と設定している。

引用文献

- 秋元典子（2013）「採択される看護研究論文—第5回論文のタイトルとキーワード」『看護展望』38(6), 64-66.
- 安瓊伊・中嶋健一（2014）「介護保険制度施行後10年間の介護の研究傾向—介護関連学会誌の文献のテキストマイニング分析を通して」『日本社会事業大学研究紀要』60, 139-155.
- 趙敏廷・谷口敏代・原野かおり・松田実樹（2013）「介護福祉教育の研究傾向と今後の課題についての一考察—テキストマイニングによる分析から」『介護福祉教育』18(2), 87-94.
- 趙敏廷・谷口敏代・原野かおり・松田実樹・谷川和昭（2013）「『介護福祉学』誌にみる介護福祉学の研究傾向—論文タイトルを用いたテキストマイニングから」『介護福祉学』20(2), 152-158.
- Franklin, C. (1999). Research on practice : Better than you think? *Social Work in Education*, 21, 3-10.
- 藤井美和（2005）「テキストマイニングと質的研究」藤井美和・小杉考司・李政元編『福祉・心理・看護のテキストマイニング入門』中央法規, 13-28.
- 後藤佐昌子・八軒浩子・高田充隆（2011）「医療薬学研究の変遷に関する計量的分析」『医療薬学』37(1), 21-30.
- 服部兼敏・鷺田万帆（2008）「学際的技術としてのテキストマイニング—その意義と看護における可能性」『看護研究』41(3), 239-248.
- 比嘉昌哉（2000）「山下のスクールソーシャルワークの独自の機能—鵜養のスクールカウンセリングとの比較を通して」『ソーシャルワーク研究』26(2), 66-71.
- 比嘉昌哉（2013）「スクールソーシャルワーカーのアドボカシー遂行機能のプロセス—子ども支援に焦点を当てて」『沖縄国際大学人間福祉研究』10(1), 1-18.
- 樋口耕一（2004）「計算機による新聞記事の計量的分析—『毎日新聞』にみる『サラリーマン』を題材に」『理論と方法』19(2), 161-176.
- 樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
- 日詰梨恵・逸村裕（2010）「CiNii 収録率から見たわが国の学術情報電子化の現状—人文学4領域を対象に」『中部図書館情報学会誌』50, 19-35.
- 入海英里子（2012）「非行」山下英三郎・内田宏明・牧野昌哲編『新学校ソーシャルワーク論—子どもを中心にすえた理論と実践』学苑社, 89-96.
- 岩渕善美・金子眞理（2014）「幼稚園教育実習における学生の自己評価分析」『保育研究』（平安女学院大学）42, 54-61.
- 岩永靖・茶屋道拓哉（2011）「スクールソーシャルワーカーの視座とかかわりに関する実践分析(1)—学校現場への視座とかかわり」『応用障害心理学研究』（九州ルーテル学院大学）10, 105-114.
- 岩崎久志（2007）「わが国の公教育における学校ソーシャルワークの固有性」『学校ソーシャルワーク研究』創刊号, 15-23.
- 岩田美香（2009）「学校からみた子どもと家族の貧困」『家族研究年報』34, 5-14.
- 門田光司（2002）「不登校児童生徒に対する学校ソーシャルワーク実践の役割機能について」『社会福祉学』42(2), 67-78.
- 門田光司（2007）「学校現場の混乱の背後にある家族問題と支援方法—学校ソーシャルワークの展開可能性」『社会福祉研究』98, 26-32.
- 門田光司（2015）「学校現場における子ども支援—学校ソーシャルワークの専門性」『社会福祉研究』122, 10-17.
- 郭理恵（2012）「いじめとスクールソーシャルワーク」山野則子・野田正人・半羽利美佳編『よくわかるスクールソーシャルワーク』ミネルヴァ書房, 124-127.
- 金澤ますみ（2013）「子どもの貧困と学校・ソーシャルワーク」『貧困研究』11, 40-49.
- 金澤ますみ（2014）「学校という場を思考する『臨床教育学』への期待—スクールソーシャルワークとの接点から」『臨床教育学研究』2, 25-34.
- 加藤博己（2007）「論文タイトルから見たスクールカウンセリング研究の文献数の推移と研究内容によ

- る分類』『駒澤大学心理学論集』(9), 85-94.
- Kelly, N. S. , Frey, A. J. , & Anderson-Butcher, D. (2010) . School social work practice : Future directions based on present conditions. *Children & Schools*, 32(4), 195-199.
- 小林正稔・遠藤建人・岡安朋子・ほか (2014) 「横浜型スクールソーシャルワークシステムの構造と発展に向けた課題—日本における今後のスクールソーシャルワークへの提言」『神奈川県立保健福祉大学誌』11(1), 13-21.
- 小榮住まゆ子 (2011) 「学校現場におけるチームアプローチをめぐる—考察—スクールカウンセリングとスクールソーシャルワークの専門性を中心に」『同朋福祉』(17), 43-65.
- 小西祐馬 (2006) 「子どもの貧困研究の動向と課題」『社会福祉学』46(3), 98-108.
- 小杉考司 (2005) 「テキストマイニングのカラクリ②—クロス集計表と数量化Ⅲ類」藤井美和・小杉考司・李政元編『福祉・心理・看護のテキストマイニング入門』中央法規, 59-73.
- 小杉考司・清水裕士 (2005) 「テキストマイニングを用いた心理学分析の応用例—異性関係への印象の分析」藤井美和・小杉考司・李政元編『福祉・心理・看護のテキストマイニング入門』中央法規, 115-132.
- 厚生労働省 (2017) 「平成 28 年 国民生活基礎調査の概況」(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html>, 2017. 11. 26) .
- 黒田宣代 (2013) 「学校教育現場における専門家導入のアポリア—スクールソーシャルワーク制度を事例に」『現代の社会病理』(28), 77-94.
- Kurtz, P. D. (1987) . A network for the evaluation of school social work practice. *Social Work in Education*, 9, 197-201.
- 峯本耕治 (2010) 「学校教育から見る子ども虐待と貧困」松本伊智朗編『子ども虐待と貧困—「忘れられた子ども」のいない社会をめざして』明石書店, 103-153.
- 文部科学省 (2008) 「スクールソーシャルワーカー活用事業」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/046/shiryo/08032502/003/010.htm, 2015. 1. 18) .
- 内閣府 (2013) 「子どもの貧困対策の推進に関する法律」(http://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/pdf/hinkon_la_w.pdf, 2015. 1. 18) .
- 内閣府 (2014) 「子どもの貧困対策に関する大綱について」(<http://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/pdf/taikou.pdf>, 2015. 1. 18) .
- 中嶋洋 (2014) 「人, 生活, 思想および公務を通して考えるホームヘルプ事業の創成—テキストマイニングを基にした原崎秀司の思想的特徴へのアプローチ」『介護福祉学』21(2), 113-121.
- 名城健二 (2012) 「うるま市におけるスクールソーシャルワーカー活用の実態と課題」『地域研究』(沖縄大学地域研究所) (9), 53-61.
- 日本学校ソーシャルワーク学会編 (2008) 『スクールソーシャルワーカー養成テキスト』中央法規.
- 西野緑 (2009) 「虐待的養育環境にある子どもに対するスクールソーシャルワーク実践モデルの開発的研究—M-GTA の分析によるコーディネーターの援助プロセス」『子ども家庭福祉学』(8), 11-21.
- 野田正人 (2006) 「子ども虐待とスクールソーシャルワーク」『子どもの虐待とネグレクト』8(2), 190-194.
- 野田正人 (2008) 「学校ソーシャルワークの目的と価値」日本学校ソーシャルワーク学会編『スクールソーシャルワーカー養成テキスト』中央法規, 60-70.
- 農野寛治 (2009) 「スクール (学校) ソーシャルワーカーの活動要素とその課題」『教育福祉研究』(大阪大谷大学) (35), 46-53.
- 小田切康彦 (2014) 「政策系大学における研究動向—論文タイトルを用いたテキストマイニング」『徳島大学社会科学研究』(28), 61-82.
- 岡安朋子 (2007) 「ソーシャルワーク視点に基づいた児童生徒支援モデル」『ソーシャルワーカー』(10), 46-53.
- 大橋智樹・今野舞 (2011) 「公立学校における学校臨床の現状と課題」『宮城学院女子大学発達科学研究』(11), 33-42.
- 大河内彩子 (2011) 「日本におけるスクールソーシャルワークの導入と課題—全国実態調査をふまえて」『フィロソフィア』(早稲田大学哲学会) (98), 69-86.
- 大西良・森永佳江・荒川裕美子・ほか (2012) 「スクールソーシャルワーカーの不登校支援における連携構造の検討」『比較文化研究』(久留米大学比較文化研究所) 46, 39-52.
- 大崎広行 (2014) 「スクールソーシャルワーカー活用の意義と課題—スクールカウンセラーとの協働に影響を及ぼす要因」『人と教育』(目白大学教育研究所) (8), 51-56.
- 大澤真平 (2008) 「子どもの経験の不平等」『教育福祉研究』(北海道大学大学院教育学研究院 教育福祉論分野) (10), 1-13.
- 大塚美和子 (2008) 「スクールソーシャルワーク実践理論の開発—学級崩壊を経験した親と学校間の仲介理論」『人間福祉学研究』(関西学院大学) 1(1),

- 43-53.
 大塚美和子 (2011) 「子どもの貧困とスクールソーシャルワーカー—子どもと家庭への新しい支援システムの必要性」 『ソーシャルワーク学会誌』 (21), 15-26.
- 佐藤広崇・金子智栄子 (2010) 「学校現場に求められる援助について—スクールソーシャルワーカーに期待される役割と課題」 『文京学院大学人間学部研究紀要』 12, 223-236.
- 沢田史子 (2013) 「宿泊予約レビューデータを利用した旅行者モチベーションの分析方法の提案」 『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』 (6), 277-283.
- 新藤こずえ (2013) 「スクールソーシャルワークからみた不登校と貧困に関する一考察」 『立正社会福祉研究』 14(2), 15-23.
- 白旗希実子・丸山和昭 (2015) 「教員のスクールソーシャルワーカーに対するニーズ調査」 『東北公益文科大学総合研究論集』 (27), 43-63.
- 鵜飼孝導 (2008) 「スクールソーシャルワーカーの導入—教育と福祉の連携の必要性」 『立法と調査』 (279), 59-68.
- 和田俊人 (2010) 「特別支援教育へのスクールソーシャルワーク導入について (その2) —特別支援教育における福祉的サポートシステムから」 『岐阜大学教育学部特別支援教育センター年報』 17, 23-31.
- 山野則子 (2006) 「子ども家庭相談体制におけるスクールソーシャルワーク構築—教育行政とのコラボレーション」 『ソーシャルワーク研究』 32(2), 113-119.
- 山野則子 (2007) 「日本におけるスクールソーシャルワーク構築の課題—実証的データから福祉の固有性探索」 『学校ソーシャルワーク研究』 創刊号, 67-78.
- 山野則子 (2010) 「スクールソーシャルワークの役割と課題—大阪府の取り組みからの検証」 『社会福祉研究』 (109), 10-18.
- 山野則子 (2015) 「効果的なスクールソーシャルワーク事業プログラム・モデルの開発」 『ソーシャルワーク研究』 40(4), 285-296.
- 山野則子・梅田直美・厨子健一 (2014) 「効果的なスクールソーシャルワーカー配置プログラム構築に向けた全国調査—効果的プログラム要素の実施状況, および効果 (アウトカム) との相関分析」 『社会福祉学』 54(4), 82-97.
- 山野則子編 (2015) 『エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク—現場で使える教育行政との協働プログラム』 明石書店.
- 山下英三郎 (1998) 「学校を基盤としたソーシャルワークの可能性について」 『国際社会福祉情報』 (22), 50-58.
- 山下英三郎 (2011) 「スクールソーシャルワークの現状と今後の可能性」 『教職研修』 39(10), 83-88.
- 厨子健一・山野則子 (2011) 「スクールソーシャルワーカーの実践プロセスに影響を与える要因—当事者に問題意識がない領域に関わるスクールソーシャルワーカーに着目して」 『社会福祉学』 52(2), 32-42.
- 厨子健一・山野則子 (2013) 「スーパービジョン体制がスクールソーシャルワーカーの専門性や効果に与える影響」 『子ども家庭福祉学』 (13), 25-33.